復活節第４主日　　イエスは羊の門　　２０２３．４．３０．

日本やフィリピンなど、島国に住んでいるとわからないのですが、違った民族が陸続きに住んでいる、大陸の国々では、門というのが、大変重要な役割を持っています。私たちが門と聞いて想像するのは、お寺などの入り口の門くらいだろうと思います。お寺の境内やあるいは大きな家の入り口に、屋根のついた門があります。しかし、外国に行きますと、古い町では、町全体を城壁が囲んで、そこから外に出る時、何箇所か開いている門を通って行くのです。この門は、夜になると閉じられて、寝ている間に敵が入ってこないようにしていたのです。

ですから、昔から、この頑強な城壁を越えて、相手の敵陣へ乗り込むためには、いろんな苦労がありました。トルコにトロアスという町があって、とても強い町だったので、それを攻めるために、ギリシャのミケーネ軍は、大きな木馬を作って、その中に兵隊を乗り込ませて、まんまと城壁の中に入れさせ、夜になったら、木馬から飛び出して、トロアスの町を占領することになったのです。

今から１５年前、２００８年の２月、韓国の首都ソウルの南大門（ナムデムン）という１３９８年（今から６２５年前）に建てられた、韓国最古の木造建築でしたが、火事で焼けてしまいました。しかし、実は、今から１１６年前、大正天皇が皇太子の時代、１９０７年にソウルを訪問するというので、その機会に、城壁を取り払ったらしいのです。門は城壁があって、初めて意味がある。それは、ちょうど日本の城がお堀があることで守られているのと同じことです。ただし、日本の城は殿様だけを守っていましたが、大陸の城壁は、お城だけでなく町全体を守るためにあるのです。

長々と、門の話をしましたが、イスラエルに行きますと、首都のエルサレムには、１６世紀にできた一辺が約１キロメートル四方の城壁があって、それに８つの門があります。町の東側には、２つの門がありますが、神殿が建っていた所へ直接入る黄金門は、「救い主がオリブ山から入ってくる時に通る」という伝説があり、それを食い止めるために、イスラム教徒が閉じてしまいました。その門から少し北に行ったところに、現在東側で唯一開いている「ライオン門」という門があって、この城壁に囲まれた中にある、イエス様が十字架を背負って歩かれた道ヴィア・ドロローサ（悲しみの道）を通ろうとして、巡礼者はここを通るのです。どうしてライオン門と言うのか、ということですが、それは１６世紀のオスマン・トルコのスレイマン（これはアラビア語で旧約のソロモン王の意味）大帝に夢の中で二つがいのライオンが現れて「もし聖都エルサレムのまわりに城壁を築いて住民を守らなければお前を喰い殺す」と言ったので、驚いて夢から覚めた大帝はすぐに城壁を築き直し、この門の上に「二つがいのライオン」を彫りつけたと言われています。現在の門は銃弾の跡がいっぱいついています。イエス様の時代には、城壁は今より全体が南にあったのですが、この「ライオン門」の辺りには、「羊の門」というのがあったようです。どうも、この近くには大きな池があったらしくて、羊がよく通っていたのでしょう。

ところが、この門には、「ステファノ門」という名前も付いているんです。今日の第１朗読に、最初のクリスチャン殉教者ステパノの殉教場面が読まれましたが、それは、この門を出たあたりで、最初のクリスチャンであるステパノが石打ちの刑で殺されたからだ、と言われています。

特に今日の第１朗読で注目戴きたいのは、終わりの方で、ステファノが殺される時に口にした言葉です。

「主イエスよ、わたしの霊をお受けください。」というのと「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」というふたつの言葉です。どちらも、ちょっとどこかで聞いたことがあるようには思えませんか。

イエス様が、十字架の上で語られた言葉と似ているでしょう。
「主イエスよ、わたしの霊をお受けください。」がステファノ。
「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」（ルカ２３：４６）がイエス様。
ステファノの方は、目下の者が主人に言う言い方ですが、似ています。

もうひとつ。
「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」がステファノ。
「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」（ルカ２３：３４）がイエス様。ただし、ルカ２３：３４は、〔　〕かっこ付きです。

どうして、こんなに似ているんでしょうか。
今日は神学校のために祈る日で、神学校で勉強するとすぐ学ぶことですが、ルカによる福音書を書いたルカという人は、その続編として、使徒言行録も書いたのです。ですから、キリストに倣って生きてゆくクリスチャンは、同じような信仰を持って死ぬ。ギリシャ語では、殉教するというのは、証しをするという意味と同じ言葉なので、筆者が意図的にそうしたのではないか。あるいは、あとの方などは、ステファノの言葉の方が先にあって、イエス様の言葉として、後で入れられたのかもしれません。

しかし、大切なことは、イエス様が、歩まれた道を、弟子たちの中の、ステファノが、それをたどって歩いていった、ということです。

今日の使徒書には、「キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残された」ということが書かれています。

「イエスは羊の門」という説教題にしましたが、イエス様が現在の「ライオン門」あるいは「ステパノ門」だと言いたいのではありません。

実は、エルサレムの北側に、新しい門「新門」というのがあります。実はここには最初は城壁があるだけだったので、他のところの様に目立ちません。あとでくりぬいて１９世紀の終わり頃、ちょうど、ソウルの南大門の周りの城壁が取り払われた少し前なんですが。
＊新門は 1889 年に遡るものである。この年に、フランス人のカトリック聖職者が、スルタンのアブデュルハミト 2 世に、キリスト教徒地区へのアクセスを容易にするために、聖母修道院の向かい側の壁を切り開くよう頼んだのである。エルサレムが東西に分断されていた 19 年間は、新門はブロックされ、そこにヨルダンの軍事前哨拠点が築かれた。

イエス様は、私たちのために、城壁に新しい門をくりぬいて、そこを通って、私たちを連れ出して、神様の元へ行けるように、先頭を歩まれ、ステファノはそれに従った、ということではないでしょうか。

私たちは、イースターを迎えて、復活とはどういうことか、毎週、福音書を読んで学んできています。イエス様の墓は、週の初めの日、女性のお弟子さんが行ってみると、空っぽだった、というのが先ず最初の出来事でした。

イエス様はその日、弟子たちに現れたのに、それに立ち会えなかったトマスは、イエス様の復活を信じられませんでした。しかし、その１週間後に、彼はイエス様と出会い、自分の見えるものだけ信じるのではなく、見えないもの、愛情とか友情とか、そんなものに信頼をおき、インドまで伝道に行くものに変えられた話が第２週。

そして、３週目は、エマオという町へ行く途中の二人の弟子にイエス様が出会った話でした。これは歴史的出来事というよりも、イエス様の復活を直接見ていない、ルカの時代のクリスチャンが、イエス様の復活をどのように理解するか、という問題でした。旧約聖書を丁寧に読んで行けば、救い主は、苦難の末に復活することが証言されている。イエス様を信じる者が二人または３人いるなら、イエス様はその中にいて、弟子たちがパンを割いている礼拝の中に、イエス様も共におられる。私たちの心が温まり、熱くなった時、イエス様は共に居てくださるんだ、とクリスチャンは信じた。

そして、今日は、恐ろしい壁のように立ふさがっている死、というものを、イエス様はくり抜いて、私たちがそれに従って歩めるように、クリスチャンの門になってくださった。

そして、来週。私たちは、ヨハネ１４章の、「イエスは父に至る道」という話を聞いて、この壁の向こうには、神様へと続く道が開けていることを学ぼうとするわけです。

イエス様は、自ら、その犠牲を払って、壁をぶち抜いて、新しい門を開いてくださった。それに感謝するものでありたいと思います。